

①対象とするまち、その現状と問題点 その中のどこに着目したか

宇部市

<災害への油断と建物の老朽化>

山口県宇部市は、人口約16.5万人の瀬戸内海に面した工業地方都市である。地震の最大予想震度は7（宇部市）で、（公社）地盤工学会関東支部による自然災害リスク指標では全国で33位（山口県）であるが、近年大きな地震や豪雨などの自然災害がなく、他の地域と比べて災害のない安全な地域だと油断している人も多い。また、自然災害リスクの中でも建物の老朽化のため、ハード面でのリスクが高いという結果が出ている。

<要支援者（社会的弱者）の増加>

高齢化率は山口県が32.8%（平成28年度）と全国平均と比べて、5.5ポイント高い（宇部市は、高齢化率が33%（2020年予想）と高齢化が全国より約10年早く訪れる地域である）
高齢化に伴い、一人暮らしの高齢者も増加しており、災害時には支援が必要な可能性も高い。

②誇りを持って住み続けたいまちの姿

1、11

○人とのつながりがあり、災害に強いまちづくり

災害時に、自宅の周りの人と声を掛け合うことができ、地域の人同士がお互いに協力して安心・安全に生活できる街。

中学生は、校区単位で通学しており、地域ボランティア活動にも積極的に参加し、地域と密接な関係にある。そのため、定期的に訓練を行うことで、さまざまな災害に合わせて、どのような対策をすればよいか、そしてどのように備えることができるか考え行動できる地域をつくることにつながる。

その備えの過程で地域の人同士の交流が増え、定期的な交流を通じて家庭環境や要支援者の状況も把握できる。今後予想される極端な気象現象のようないざというときにも対応できるよう、事前に地域で相談し、地域全体のレジリエンス（災害強靱性）の構築につながる。

③住み続けたいまちに近づくためのプロジェクトアイデア 目的やターゲットを明確にして何を行うかを具体的に

「防災士」の中学生バージョンの制度を作り、中学生から地域に貢献し、防災、そして実際の災害時にも活躍できるような具体的な訓練を日頃から行う。
下記の1、2のプログラムを修了した人数を各学校ごとに公表し、各校区競い合いながら、市全体で中学生を中心とした防災意識を高める活動

1) 中学生防災マスター基礎編～半径50mの顔の見える避難訓練～（目標はすべての地域での実施）

- ・地域の避難訓練…地域の人と一緒にハザードマップを確認し、避難の適切なタイミングを考え、地域の危険箇所の点検（建物の老朽化）、避難場所、家族の集合場所、地域の強みや弱みを確認し、要支援者が身近にどれくらいいるのか、だれが支援をできるのか、災害の時間帯等によっても分担を確認する。

2) 中学生防災マスター認定編～半径1kmごとに、避難所運営訓練～

- ・避難所運営の方法をゲームで体験（HUG（静岡地震防災センター制作））した上で、実際に避難所運営体験を自分の校区内で1泊2日で実践する。
実際に避難所運営委員会と協力し、避難所開設準備から、炊き出し、トイレの確保、要支援者の対応の確認、情報収集、簡易トイレの設置、避難所ルールの決定、簡易ベットで寝るなどを体験する。これにより、日頃から自分の家庭での備えをどのようにするか意識が高まる。

④プロジェクトタイトル 中学生防災マスタープログラム

⑤プロジェクトを拡げるための協力先と連携のイメージ *連携先はいくつでも可

- ・町内会の会長さんなど
- ・地域のふれあいセンター（公民館）館長さん
- ・防災士
- ・自主防災組織
- ・小中学校・公民館などの避難場所に指定されている場所の管理者
- ・宇部市の防災危機管理課の方
- ・すでに防災訓練を実施されている地域の中学生